

Title	大江健三郎とキム・ジハ(金芝河)との比較研究 : 「民主主義」と「民族」に対する理解を中心に
Author(s)	洪, 珍熙
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58746
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	洪 珍 熙
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	甲第 18 号
学位授与年月日	平成14年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	大江健三郎とキム・ジハ（金芝河）との比較研究 －「民主主義」と「民族」に対する理解を中心に－
論文審査委員	主 査 教授 尾 上 新太郎 副 査 教授 細 谷 昌 志 副 査 教授 森 藤 一 史 副 査 助教授 岸 田 文 隆 副 査 准教授 萩 原 文 隆

論文の内容要旨

1974年、韓国の軍事独裁政権によって詩人のキム・ジハが死刑宣告を受けることになった。当時、日本では、キム・ジハを救うための救命運動が行われたが、大江健三郎もその参加者の一人であった。その救命運動をきっかけに、大江はキムの作品に関心を持つようになり、二人の交流が始まる。私見によれば、大江とキムにおける交流を可能にしたのは、「民主主義精神」への信頼という共通点からではないかと思われる。言い換えれば、人間の尊厳や自由を抑圧するあらゆる強権への抵抗、そして、社会の周縁に存在する「弱者」としての人間に対する共感が二人にはあった。特に、二人の初期作品といわれるものの中には、上述した「民主主義精神」が大きく反映されており、戦後世代の文学者である大江とキムが、少なくない思想的な影響を受けていることが判る。しかし、上述した共通点を持ちながらも、二人は、「民主主義精神」の実現を担う「主体性」の問題においては異なる立場を見せているのも事実である。つまり、大江が、あくまでも一人の「個人」における主体性を求めていることに対して、キムは、「民族」という共同体の主体性に注目していることがそれである。そして、このような二人の異なる観点には、「民族」と「民主主義」をめぐる日韓両国の歴史的・社会的な背景も関わっている。

それで本論文では、「第一章」において、第二次世界大戦後の日韓両国の文学における「民族」の捉え方を検討した。まず、日本の場合は、竹内好や三島由紀夫、大江健三郎を中心に、それから、韓国の場合は、ペク・ナツジョン（白樂晴）とキム・ジハを中心に「民族」の問題に対するそれぞれの見解を検討した。

大戦後の日韓両国における「民族」の理解を検討した結果、韓国の文学では民族が一つの「主体性」や「意識」として継続していることに対して、日本の文学では戦前の民族主

義(=「超国家主義」)の呪縛から抜けきれず、民族を意識的に文学の素材として採り上げようとする傾向は殆ど見られなかった。勿論、日本でも、「国民文学論」を提唱した竹内好のように、文学を通して強く民族意識を求めた人もいたが、それは稀な例に過ぎなかった。以上のことから、両国の文学者の「民族」に対する理解には、戦中における民族意識のイメージが戦後になってからも根強く存在したことと、大戦後の各社会における民族意識に対する必然性の有無によって、明らかな違いを見せているのが判った。

上述した「民族」に対する文学者たちの理解については、大江とキムにも同じ傾向が見られる。大江が「民族」の問題を、主体性や意識的な要素を排除した、あくまでも文化的な要素として理解していたことに対して、キムは、「民族(民族の大多数を成す「民衆」と同一の意味として)」という共同体に基づく主体性に注目していた。その上、二人における捉え方の違いの背景には、異民族との共存という問題が潜在していた。即ち、大江が、同じ日本人でありながらも正当な主権を使えない返還前の沖縄の人々の立場を考えることで、異民族である「沖縄民族」の歴史や文化に関心を見せたのに対して、キムには大江のような異民族の存在がなかった。二人は、現実社会の周縁的な存在として「民族」の問題を考えるという共通点を持つものの、大江は沖縄民族の歴史や文化を尊重することで、キムは韓国社会の底辺に存在する「民衆」の主体性を肯定することで、それぞれ違う捉え方をしていたのである。

その後続く「第二章」、「第三章」では、それぞれ大江とキムの作品分析を通して、二人における「民主主義」と「民族」の理解について考察した。「第二章」では、まず「セヴンティーン」第一、二部(1961年)の作品分析を通して大江における主体性の問題について検討した。その結果、大江は、「独りぼっち」としての人間、即ち、一人の「個人」における自由な思考や判断に注目していたことが判った。この作品の中には、主人公の少年が自分の「私心」を棄て、天皇への「忠誠」を決意する場面が描かれているが、これは、個人としての主体性が放棄される象徴的な内容として意味づけられている。何より大江は、天皇を建前とする国家権力の抑圧によって個人の自由な思考が完全に否定された、戦前世代としての体験を思い出させることで、戦後、「個人」における主体性が否定されることに警鐘を鳴らしたのだと思う。

それから、大江が「個人」における主体性に重点を置いているもう一つの理由として、日本の「村落共同体」に対する彼の違和感を挙げる事が出来る。大江の小説には、「谷間の村」を根拠地とし、共同生活を行なう村人たちの姿が描かれているが、大江はその村人たちを通して、日本民衆の特徴を表そうとしたと思われる。中でも、『芽むしり仔撃ち』(1958年)には、戦中、ある谷間の村で暮らす百姓たちと、そこに疎開した感化院の少年たちとの対立が描かれている。村人たちは自分らの安全を守るために一つの環をつくって

結束し、余所者である少年たちを全く受け入れようとしなかった。大江は、このような村人たちにおける排他性とそこから帰結する差別を描くことで、日本の村落共同体に対するある種の違和感を示していたと見られる。

『芽むしり仔撃ち』が村落共同体における排他性を示すものであれば、その後作品分析した『万延元年のフットボール』（1967年）では、日本の村落共同体における主体意識の脆さが指摘されている。『万延元年のフットボール』には、「スーパー・マーケットの天皇」という象徴的な人物によって経済的に支配されている谷間の村が登場する。ある日、村の人々は、根所鷹四という一人の青年の指揮に従って、スーパー・マーケットを略奪することで、スーパー・マーケットの天皇に対する抵抗を示す。しかし、時間が経過することにつれて、抵抗の意義はなくなり、村人の中には、略奪した物を返しにいく人が続出する。結局、スーパー・マーケットの天皇に対する村人の抵抗は、共同体の動きによる一時的な感情の便乗に過ぎなかったことが分かる。

以上の作品分析を通して、大江は、日本の村落共同体における排他性と主体意識の脆さを、日本民衆の特徴として捉えていたことが判る。それから、このような日本民衆に対する失望と違和感こそ、大江が「民衆」から自立した「個人」の主体性の重要性を見出した、もう一つの原因として働いていたと考えられる。

「第三章」では、キム・ジハにおける「民主主義」と「民族」の理解について考察した。キムの「戯曲」と「譚詩」におけるそれぞれの作品分析を通して検討したところ、キムは、韓国の軍事独裁政権という現実的な政治状況を認識するとともに、「民衆」という被支配者の存在に注目していたことが判った。キムは、民族を構成する大多数である「民衆」にこそ、これからの韓国の歴史を発展的な方向に動かしていく原動力が存在することを期待した。その上、韓国の朝鮮時代後期における民衆芸術との出会いによって、民衆芸術の中に潜在する民衆の笑いと主体意識の強靱さに共感を持つようになったのである。そこで、その民衆芸術の形式（中でも、仮面劇である「タルチュム」と、「パンソリ」）を自分の作品の中に取り入れることで、民衆意識の伝統を継承化しようと試みた。

キムの創作作品である五篇の「戯曲」と「譚詩」には、当時の社会的な状況を背景に、民衆の置かれていた現実が描かれているが、その中でも特に「譚詩」は、朝鮮時代後期の民衆芸術である「パンソリ」のリズム感や、諷刺と諧謔の精神を取り入れることで、民衆の持つ生命力や健康で素朴な笑いを生かした作品になっていった。大江が日本民衆に対して否定的なイメージを持っていたのとは対照的に、キムは、民衆という共同体の持つ素朴な笑いや生き方に強く共感していたのであった。

そして、最後の「第四章」では、キムの文学に対する大江の一面的な理解を指摘することで、「民族」や「民主主義」に関する二人の違いをより明らかにした。大江は、救命運動を一つのきっかけとして、キムの文学世界に注目した。特に、「譚詩」や「大説『南』」と

いった、「パンソリ」に基づく作品に興味を示しながら、キムの文学を高く評価したのである。しかし、キムに対する大江の理解には、作品における構造や表現（人間の肉体性に対する強調や、反復・誇張された描写など）に対する指摘はあるものの、「民衆」の主体性に対する理解は見受けられない。キムの作品の中に使われたあらゆる表現は、「民衆」の強靱な生命力や素朴さに基づくものであったが、大江の理解には、そのような「民衆」の精神が抜けていた。これは、「個人」における主体性を強く求めたものの、共同体としての「民衆」と「個人」を結びつけることが出来なかった、大江の文学的特徴を表すものだと考えられる。

以上のように、「民主主義」と「民族」に対する大江健三郎とキム・ジハの理解を考察した。本研究は、日韓両国における「民族」と「民主主義」をめぐる歴史的・社会的な背景と文学との相関関係にも着目しながら、「民主主義」と「民族」をめぐる大江健三郎とキム・ジハの認識の違いを、初期作品に限ってではあるが、明らかにした。しかし、大江の場合は、障害者である息子との共生を通して、キムの場合は、長年に亘る収監生活を通して、二人とも文学世界の新たな展開を迎えた。今後の課題としては、これらの問題をも視野に入れて、初期から現在に至るまで、「民族」と「民主主義」に対する二人の理解、如何という観点から二人の文学的軌跡を辿り通すことが残っている。

論文審査の結果の要旨

本論は、大江健三郎と韓国の金芝河との比較研究を行なったものである。

論者の主張は以下の通りである。

大江健三郎は、戦後民主主義者で、個人の主体性を重んじる文学者だが、そこには、フランスのサルトル流の実存主義の影響があったと言われている。だとしても、より本質的には、戦後日本の時代思潮の影響をこそ指摘すべきだろう。日本の戦前、戦中においては、独善的で排他的な民族主義が横行した。このことに鑑み、戦後の日本人は、概して民族というものに対して冷淡な態度を取る。大江もそのひとりである。

また、大江は、日本の村落共同体他の各種の共同体によって行われる弱者に対する排除と暴力に鑑み、個人の主体性をより強く大事なものとして捉えたのでもあった。

大江は戦後民主主義者の代表的存在とされるが、その民主主義は民族主義とは抵触するものである。日本では、歴史事情からして、そのことは正当性をもつと言える。

論者は、このような考えを、「セブンティーン」第一部、第二部、「飼育」、「万延元年のフットボール」、等の小説、また、エッセー集『厳粛な綱渡り』、これらを中心につぶさに論じている。

また、論者は、このような意味での民主主義者・大江が韓国の民主主義や民族主義、民衆主義の理解にどう関わっているかをつぶさに追究している。

韓国の場合、歴史的に言って、国権が比較的弱かった。国家それ自体が否定された時期もある。このことと密接に関係することだが、韓国の場合、人々の帰属の場所として、民族という共同体が大きな力をもった。民族、乃至、民族という人間集団の大部分を占

める民衆、こういったものの主体性を無視して、韓国の歴史を考えることはできない。

韓国では、第二次世界大戦後、民族のもつ主体性の問題が、歴史学・社会学、また文学、これらの世界において、大きなテーマとして議論された。特に1970年代に入ってから、それらの世界において、支配者中心の歴史観から、被支配者である民衆中心の歴史観への移行が特徴的に見られる。

また、大江は、軍事独裁政権から弾圧されていた詩人・金芝河を通して、韓国における文学と民族、民衆との関連性に関心を示した。金は、「譚詩」他の作品を通して、独裁政権に抵抗する韓国民衆の、歴史を動かして行く原動力を描こうとした。しかし、残念なことに、大江は金のそれらの作品からそのような民衆のエネルギーを感じ取ることができなかった。韓国の民衆における暴力とは、今の場合、被支配者の独裁政権に対する抵抗という意味をもち、その意味で正当性をもつものなのである。しかし、大江は、韓国における民衆とか民族のもつ主体性、また、その発動の正当性、これらを正しく理解することができなかったのである。これは、日本の歴史における民族主義の非、民衆共同体の弱者に対する非人間的な態度、これらに対する大江の批判と関係があることである。大江のその批判は、日本においては正当性をもつ。しかし、自国の民族他の共同体に関する見解をもって直接、韓国というおのずから違った歴史をもつ国に対処するのはいかなるものか。もっと、丁寧な思考態度を取るべきではないのか。

以上、論者の視点で述べた。

本論は、戦後民主主義者・大江の個人の主体性論の本質を究明すると共に、その結果、自国・日本の社会に対していただく彼の違和感が、他国、即ち、韓国の民族、民衆の理解に当たって、どのような形で影響を及ぼしているかを明らかにすることに、第一のポイントをおいたものである。課題の追究は成功裏に終わっている。論述は明解であり、説得力に富む。

大江、乃至、大江文学は、戦後の日本における個人主義や民主主義の確立の点で大いに貢献したと言える。そのことで、日本乃至欧米において高い評価を、大江、乃至、大江文学は受けていると言える。だが、足下のアジアの、それも隣国・韓国からこのような批判が出ることは、また、十分、注意されてよいことである。日本もアジアの一員であることを忘れまい。大江の個人主義とか民主主義というものを現実の世界で具体的に理解する上で、本論の提供する問題は大きいのである。その点で、本論には高い評価が与えられる。

ただし、この際、以下のことを言っておきたい。

独善的で排他的な民族主義は、否定されるべきである。このことは、今日、日韓両国の人々にとって常識になっていると言えるだろう。問題なのは、民族という共同体がもつ本質的な排他性である。世界の今日の国家形態は、国民国家と言われるものである。国民国家のベースには民族がある。民族は、かつて田辺元が言ったように、自己の存続を第一の目的とする存在である。国民国家は、人類に開かれたものという意味ももつが、また、田辺の言うように、国家のベースの民族の点で、他国の侵略をも、時として肯定するものである。例えば、民族が窮乏の状態にある時などに。

今日、国民国家のゆらぎということが、日本の内外で取り沙汰されている。これは、近代的国家形態たる国民国家の負の面に眼をおいてのことと思われる。国民国家は、その構造において、独善的で排他的な側面を外しえない。

韓国も、すでに国民国家を形成しえていると判断される。それなら、韓国の人々が、この国民国家の負の面に問題をもっても不思議ではない。また、もつべきである。本論

に引用されている白楽晴や金芝河などは、いち早く、この問題にも認識を働かせたのではなかったか。

何であれ、本論の論者が、この問題についての考察を主題的に行っていたなら、さらに高度の論文ができ上がっていただろう。